

# 片山タイムズ

第七号

令和四年  
十一月吉日

## 炉開きと茶壺

十一月は茶人の正月といわれています。いわゆる炉開きです。茶壺に詰められた今年のお茶がはじめてふるまわれます。

この茶壺というのは非常に格が高いものでした。現在の茶事やお茶席では、茶入れが重要視されがちですが室町時代では、観賞対象として最も茶道具の中で珍重されてきました。その主な理由は、輸入に頼らなければならなかったからだと推察されます。その後国内でも、瀬戸や丹波などで茶壺は作られるようになります。

時代は下り江戸時代になっても茶壺は格式があるものとして、庶民からは恐れられていました。



茶壺道中の様子(wikipediaより引用)

みなさんもご存じかと思いますが日本のわらべ歌【ずいずいずつころばし】ではこんな歌詞がでてきます。「茶壺に追われてどつびんしゃん抜けたらどんどんこしよ」

これは京都から將軍家へのお茶壺道中の描写と言われています。お茶壺道中が来たとき、家の戸(ト)を「びんしゃん」と閉め、じつと通り過ぎるのを身を潜めてまち、お茶壺道中が街からぬけたら、どんどんこしよ「やれやれ」といったところでしょうか。

ちなみに他の大名の参勤交代より格が上で道を譲らなければならず御三家も同様で摂関家や門跡と同列だったとのこと。どれだけ茶壺に力があつたかの証左でしょう。

## 炉開きしました



炉開きの様子

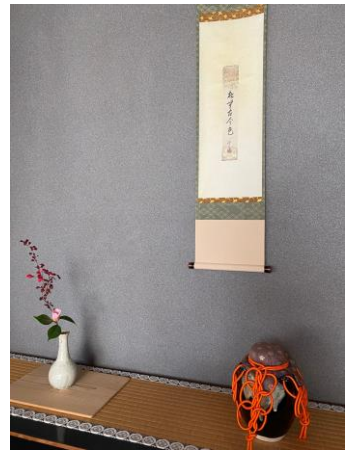
コロナの影響でここ数年できなかった炉開きを簡易な茶事形式で開催しました。松風の音を聞きながら、お汁粉と猪子餅でいただく濃茶・薄茶はまた格別だったと参加者からお言葉をいただきました。

躁を使い茶室に入ると普段と同じ風景でも少し凛とした空気が漂います。社中での茶事もこれを機に少しずつ例年通りに戻していければと考えています。



お点前をされる石田さん

## 今月の床



床

「松無古今色」  
「まつここんにいろなし」と読みます。淡々斎の御筆になります。

対句として「竹有上下節」(たけじょうげのふしあり)があります。直訳すると「松の色はいつの時代も変わらず、竹には節によって上下の違いがあります。」となります。

どんなに時間が経過しても変わらない松の色は平等をあらわし、竹の節の上下は区別をあらわすといわれています。世の中は差別区別で成り立つものでもなければ、平等だけで成り立つものではない。

しかしまた変わらない松の色も時代時代での差は生まれ、竹は節で上下にわかれていても一本の竹でできており優劣はありません。

差別・区別も平等も一見大きく違うようでもちよつとした違いだったり、反対から見れば差別・区別と平等の概念が180度かわることもあります。みなさんもお稽古でこの短冊をみて、少し考え感じ取っていただくと幸いです。

## 今月の花

「西王母」  
炉の時期を迎えると、床に必ずと言っていいほど凛として存在するのが椿です。

今起床にあるのは西王母という種類になります。金沢を代表する椿といわれています。

淡桃色地に外弁が紅色のぼかしが入る一重咲きで、筒咲き、中輪のツバキです。

加賀佐助の自然実生と推定されています。

## 今月のお道具

姥口釜(うばぐちがま)

初代吉羽與兵衛の作になります。柄杓の扱いが通常とすこし異なる部分があります。炭で湯をわかすと、きれいな湯気とともに心地よい松風の音を奏でてくれます。ぜひお稽古しながら目と耳で感じてみてください。

「初代吉羽與兵衛」

1895年 京都四条室町に生まれる  
幼名 健之助

1906年 12歳にして京都三条釜座の千家十職  
大西家13代目浄長の門下に入る

1925年 大西家より別家を許される  
師匠浄長より與兵衛の号を受け京釜師として独立

表千家様即中斎宗匠、裏千家淡々斎宗匠より御箱書及び御好の釜の御用を賜る。爾来京釜の伝統を守り各種展覧会に出品受賞し、技術保存優秀作家に指定も受ける

1972年 喜寿を期に長男宗敏に與兵衛を譲り、  
隠居名を惣興とする

1977年 著書「釜」光琳社 晩年の作品制作に意欲をもち、又、後継者の指導、小作釜の鑑定研究にふける

1983年 「京釜の真髓」と題して、京郡高島屋にて、米寿記念展を催し、最終晩年の作品を発表

1986年 91歳にて没す

※吉羽與兵衛  
<https://official-ecyoshina-yohey.com/> 引用



姥口釜で稽古中の藪崎さん